

第1章 名蔵シタダル海底遺跡の研究史

大瀨 永亘

1. はじめに

九州島の南端薩南半島と台湾の間、1,200kmにわたり弧状に連なり点在する島々を南島（南西諸島・琉球列島）と呼んでいる。この南島に点在する島々の中でも、北の大隅諸島から奄美諸島を経て沖縄諸島までは、一つの島から隣接する島が見えるために丸木舟などによる有視界渡海が可能である。ところが、沖縄島と宮古島の間は、約300km離れているため中間洋上において沖縄島や宮古島が見えなくなる。また、そこには水深1,000mの海溝があり宮古凹地と呼ばれている。そのためか、縄文・弥生式土器文化伝播の南限は、この沖縄諸島となっている。宮古諸島から先は八重山諸島、台湾、台湾の西には中国大陸、そして台湾の南はバシー海峡の島々を経てフィリピンのルソン島、東南アジア島嶼地域へと有視界渡海可能な間隔で島々が連なっているので、島伝いの移動が比較的容易である（大瀨 2008）。

この南島の最南端の宮古・八重山諸島は先島と呼ばれている。先島の先史時代は、奄美・沖縄諸島の先史文化との関連がなく、特異な物質文化が形成・展開したので先島文化圏と呼び（大瀨 1999）、この先島文化圏は、文化内容の違いなどによって、大きく古い順に先史時代の「第一期」（滝口ほか 1960）有土器文化、「第二期」無土器文化、原史時代の「第三期」スク文化（大瀨 1985）（註1）の三つの時期に考古学編年されている。この先島の先史文化は、世界で稀に見る「第一期」の有土器文化から「第二期」の無土器文化へと変遷し、それは、異なる人間集団・民族の移動や交替によるものと考えられる。またその文化源流は、中国南部・台湾やフィリピンなどにあり、集団の移動や種族の交替により先島の先史文化が形成されたと考えられる。これは、先島が地理的に中国大陸と南島の島々を結びつける位置にあったからであり、永い年月にわたって民族や文化の交流ルートの架橋として幾重の多様な南方的な先史文化を受容し、複雑な文化要素を内包することになったと考えられている（大瀨 1999）。

八重山諸島の各文化のカーボンデイトーピング（放射性炭素年代測定法）などの結果による時代区分は、次の通りである。

「第一期」有土器文化（4,250～3,260年BP）

「第二期」無土器文化（2,200～940年BP）

「第三期」スク文化（11世紀～16世紀）

有土器文化と無土器文化の間には約1,000年間の断絶・空白がある。この年代懸隔（ミッシング・リンク＝空白時代）を埋める遺跡や遺物はこれまでのところ見つかっていない。また、有土器文化や無土器文化がどれだけ古く遡るか（上限）、また、有土器文化がどこまで続くか（下限）などは不明である（大瀨 1999）。

八重山諸島の外来文化の受容は、古く無土器時代の7世紀に遡り、その最初はやはり北方・九州からの影響であった。それは、遣唐使船などに見られる造船技術の発達にあり、大型・高度化した結果と思われる。その後、南島ブランド（南島産物）の掛け軸の軸木や太刀の柄の材となる赤木、牛車の屋根に飾る材である檳榔（＝クバ）、儀礼用の杯、螺鈿細工の素材貝のヤコウガイなどの威信財を求めて南島の島々への往来が頻繁に行われた（山里 1999）。ところで、沖縄のグスク時代（11～16世紀）の遺跡から数多く発見される武器や武具は、八重山のスク文化期の遺跡からほとんど発見されていない。また、沖縄で広く見られる城郭・土塁・

堀切などの防御的な施設も宮古・八重山にはない。ただ、スク文化の遺跡の立地場所（例えば石灰岩上）によっては屋敷の囲いの石垣がある。また、彼らの居住した場所から権力や富の象徴的な文物（例えば龍泉青磁の花瓶や大型香炉あるいは元青花など）は出土せず、どのスク文化の遺跡からも画一的な生活用品（八重山では土鍋用の外耳土器、宮古は水運搬用の宮古式土器など）や数多くの中国製の食膳具・貯蔵具の貿易陶磁などが出土している（大瀧 2006）。近世にみられたマラリアの蔓延などもなかったと考えられる。それらのことが、誰もが頻繁に渡来してきた理由の一つであろう。ただし、スク文化の前期（11～14世紀）と後期（14世紀中葉～16世紀）では若干の相違が認められる。このスク文化と接触・交易をした集団には、九州海商や中国福建沿岸海商²（大瀧 1999 143頁／佐久間 1975／和田ほか 2003）（註2）などが考えられる。

交易の萌芽（スク文化前期）の初期にあたる11～13世紀中葉ころの交易は、北から南進した九州海商が主な担い手だったと考えられる。南島経営（佐藤 1970／国分 1972）により徳之島産のカムイヤキが南島一円で消費され、その流布とともに沖縄本島のグスク文化を受容した（高宮 1967）。ところで、スク文化期の遺跡群は、そのほとんどが海岸低地砂丘や海岸寄りの台地（洪積世や海岸段丘）に立地しているが、初期には内陸部での展開が認められる。すなわち12～13世紀以降の遺跡群は、粟・麦・稲作農耕の最適地となる2～3km内陸部のイシクムリイ（独立した石灰岩の山）上に立地している。これに並行して、生産具も石器から鉄器、煮沸具は焼石による石蒸焼き料理（Stone oven）やストーン・ボイリングから長崎産の滑石製石鍋や土鍋（外耳土器）、食膳具・貯蔵具は葉（クワズイモ、バショウ、クバ、ハマユウなど）・貝殻・竹筒・革袋から中国産の白磁・青磁・褐釉陶器、徳之島産のカムイヤキ、壺形土器へと大きく変化したと考えられる。さらに、石灰岩に立地する遺跡に限るが、屋敷の囲い野面石積み石垣などもこのころから開始されたと考えられる。

交易が旺盛（スク文化後期）となる13世紀後半～14世紀ころからは、西からの中国福建沿岸海商らが、八重山島民らと接触・交易を開始し、八重山諸島を元私船の南島の北進交易ルートの一つの拠点として福建産粗製白磁³碗（註3）、青磁、褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）をもたらした。1368年、漢民族の国家「明」が興り、招撫政策に応じる諸国との冊封制度による朝貢・進貢貿易（公貿易）が行われる。民間（私）貿易は、すべて禁止した。しかし、この明国の海禁政策が始まって、中国福建沿岸海商らが私船のジャンク船に羅針盤を設置（田中 1968）し、宮古や八重山の島々に産出する交易物産（海産物など）を求めて回航してきたのである。従って、当時の遺跡は島々の周囲を取り巻く裾礁（リーフ）の割れ目（船の出入りに利用された）が一望できる台地一帯への立地が目立つ（大瀧 2008）。

中国福建沿岸海商らが渡航してきた目的は、宮古や八重山の島々で豊富に産出する海産物の宝貝（海巴、スビガイ）、ヤコウガイ＝夜光貝（螺殻、ヤフンガイ）、真珠貝、ナマコ（海參、イリク）、フカのひれ（魚翅）、ジュゴン（儒艮、ザン）、タイマイ（玳瑁、ベッコウガメ）や牛皮、苧麻衣（上布、グイフ）、芭蕉布、葉草などを求めてのことと想像され⁴（三島 1989／森 2004／高崎 1971）（註4）、その交易品の一つとして中国陶磁がもたらされた。宮古や八重山の島々が、中継地として私貿易の流通の拠点としてのネットワークで結ばれていたと想定する。

14世紀中葉～16世紀ころは、大量の中国の青磁・白磁などの陶磁器が宮古や八重山に持ち込まれた。また、後に染付（青花、16～17世紀のもの）などももたらされている。さらに民間の九州海商らが装飾具の勾玉（ガラ玉）、丸玉、ガラス丸玉などの玉類を携え⁵（岸本 2003）頻繁に来島した（註5）。それは、茶道の普及とともに武士や商人らが富や権力の象徴であり威信財として、また実用の器としても中国製の貿易陶磁など

を求めたことによる。ここに宮古や八重山の島々を中継の拠点にして、北からの九州海商、そして西からの中国福建沿岸海商らとの私貿易が盛んに行われ、16世紀ころその頂点に達した時代といえよう。代表的な遺跡には、石垣島の北海岸の仲筋貝塚（14～16世紀ころ）、元椶海村遺跡（14～17世紀前半ころ）、西表島の東海岸の与那良村遺跡（14～17世紀中葉ころ）、西部の内離島の成屋村遺跡（14～18世紀中葉ころ）などがあげられる⁶（仲筋貝塚調査団 1981 / 青山学院大学調査団 1977 / 1980 / 1982 / 1987）（註6）。なお現在までに、これらの遺跡からは徳之島産のカムイヤキ（11世紀～13世紀ころ）が一片も発見されていないことを付加しておく（伊仙町教委 1985）。

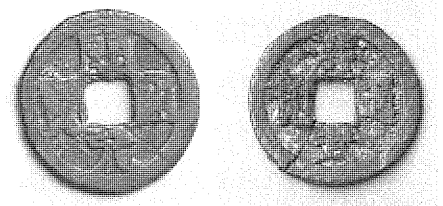
さて、名蔵シタダル海底遺跡は、石垣島の西海岸、名蔵湾の南島側一帯に位置する南のシタダル浜から北側のクマダ浜、クードー浜にかけての海岸から海底に広がる遺跡である。「シタダル」とは、岩と岩の間から水がしたたり落ちる地形の様子から名づけた地名である。かつて、この地で御木本幸吉が真珠の養殖を大正3（1914）年5月から着手していた（牧野 1972）。それゆえ漁民はこの一帯をヒンクンヤー（真珠の家）とも呼んでいた。

この名蔵シタダル海底遺跡からは大量の中国製の貿易陶磁が一括して出土している。これらの大部分は、青磁碗や白磁小皿、褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）などの破片である。他に中国の銭貨「開元通寶」（621年初鑄）や「洪武通寶」（1368年初鑄）なども採集されている。この遺跡の性格については、大別して「港（船着場）とする説」、「沈没船（難破船）とする説」、「台風などのため名蔵湾に避難した際に、荷がこぼれたとする説」の三つの説があった。また「沈没船（難破船）とする説」でも沈没船（難破船）は、一艘ではなく二艘とする考え方を唱える研究者もいる。陶磁史研究家関口広次氏や著者などは、1978年まで当地を共同調査研究した結果から、沈没船は一艘とする説が妥当と考えている。

日本国内で名蔵シタダル海底遺跡のように一括大量の中国製の貿易陶磁が出土している例はなく、貿易陶磁研究のなかでも交易実態解明に注目されるべき遺跡であるが、意外にもここをとりあげた研究者は少ない。これまで名蔵シタダル海底遺跡と関わることからや論文、新聞上での記事などについて狭学でそしりをまぬがれないが、筆者が知る範囲の資料を時系列的に網羅して下記に示すこととする。

2. 名蔵シタダル海底遺跡に関することがらや調査結果や関係論文など

[1] 1960年6月 著者（大濱永巨）が石垣島の西海岸、名蔵湾シタダル浜辺や海底から中国製の貿易陶磁が出土することに注目したのは、今から48年前の1960年6月ころであった。中学2年生の夏（1959年8月）に早稲田大学八重山学術調査（団長滝口宏）による山原貝塚（字登野城の村はずれにある中世のスク時代前期の集落跡）の発掘調査に体験参加した。その機会に、W・I・O考古学研究グループをつくり、郷土史家宮良賢貞先生の指導を受けながら石垣島の各遺跡踏査を行っていた。その際にビロースク遺跡、名蔵貝塚、神田貝塚などの遺跡を次々と発見した。翌年6月、名蔵湾のシタダル浜で、友だちらと海水浴をしていたら浜辺に青磁碗片などがたくさん拾えた。一帯を綿密に踏査したら中国製の白磁小皿や一握りの銭貨のかたまりを採集した。ほとんどが判読不可能で磨耗していた。かろうじて「開元通寶」（621年初鑄）、「洪武通寶」（1368年初鑄）などの2枚が判読できた。



挿図1 採取した「開元通寶」(左)と「洪武通寶」(右)

山原貝塚から出土した類似の青磁碗や南蛮壺甕などが、伝承や集落跡でもないこのシタダル浜辺や海底から何故たくさん拾えるのか不思議に思っていた。

[2] 1961年 筆者：大瀨永亘は、日・米・琉の琉球古文化総合調査団（ハワイ美術館と琉大共催、早大、上智大学参加）による琉球古文化財調査のためジョージ・H・カー博士が来島した際に、調査団一行を名蔵シタダルの浜辺（当時筆者はクードー浜と勘違いして紹介した）へ案内した。この海岸一带から中国製の貿易陶磁が一括してたくさん採集されるのに驚かされていた。

[3] 1962年12月25日・1963年の春 ジョージ・H・カー博士がリチャード・ピアソン氏や通訳の大城精徳氏らとともに来島した。筆者（大瀨永亘）は石垣島の石底山遺跡などの各遺跡を案内し、また、リチャード・ピアソン氏と通訳の大城精徳氏らとともに神田貝塚の試掘調査に体験参加した。その際、調査一行と一緒に名蔵シタダル海底遺跡を再度案内したら「もしかしたら、難破船（沈没船）ではないかと？」との印象を筆者に語られた。

この点について、リチャード・ピアソン氏は『Archaeology of the Ryukyu Islands (琉球諸島の考古学)』（1969年）の中でクードー遺跡（名蔵シタダル海底遺跡）から出土した中国製の貿易陶磁などについて述べており、その項を以下に翻訳した。

「(中略) 観音崎と名蔵湾の間にあるクードー遺跡は1962年12月25日に大瀨永亘氏より私に紹介された。この遺跡にはたくさんの青磁の破片が散布していた。12月に数日間、そして1963年の春にも表面採集をした。カー博士によって採集された最大のコレクションがホノルル美術アカデミーと琉球博物館にある。クードーのほとんどの破片は波照間遺跡で発見されたものと同じに見える。多くの皿の内底面には花のモチーフや人物文が印で押されている。ほとんどの破片は満潮時には水面下数フィートで発見されるので、それらの外面はサンゴのカルシウムでおおわれている。発見される多くの器形は直径4cm程の高台のついた碗である。そのほとんどは海中で腐食されていて光沢はなく、色の識別を困難にしている。それゆえ本来の青白色の破片はそのビーチでは発見されていない。少量の摩耗した褐色の陶器片が発見されたが、これらは明らかに本来の褐釉陶器の一部である。



挿図2 調査中のW・I・O考古学研究メンバー

クードー遺跡の状況については、一言述べるに値するものと思われる。遺物が散布する岩場から海岸の後方は、草木におおわれた岬に面しており、その麓には一つの湧泉がある。しかし居住地として利用しようとした痕跡や海岸倉庫などの痕跡がないという周辺環境から見る限り、クードー遺跡は難破船による結果としか考えられない。もしそれが認められるならば、クードー遺跡から発見される陶片は全て一時期の所産と考えられる。従って、このクードー遺跡検出陶片からの年代観は、長年にわたって放置攪乱され、時には金目当ての盗掘者たちによってひどい攪乱を受けた窯跡資料による年代観よりも信憑性が高い。(クードー遺跡から検出した) 高い高台を持ち、オリーブグリーン色の釉薬をかけたいくつかの底部は青磁タイプのものに属すると考えられる。もしクードー遺跡が難破船による遺跡であることが事実とすれば青磁AタイプとBタイプは異なった窯による同時期の製品である可能性がある。しかしな

がら、Aタイプの青磁と染付や白磁が共伴することからすれば、Aタイプの青磁はBタイプの青磁の生産が終った後にも作られ続けたものと考えられる（略）」と、述べている。

さらに、通訳で歴史家大城精徳氏は「琉球の焼物の本質を歴史の中に探る（上）」（『琉球の文化』第1号 琉球文化社 1972年）という論文を発表し、その中で「（略）併し、八重山地方は違う。ここは、中国と地理的に近いという有利な条件もあってか、独自の貿易を営んでいたようで、石垣、西表の主要な島だけにとどまらず、小さな島々に至るまで、いたるところに青磁の破片が散らばっており、輸入陶磁器が上下の差別なく広範に使われていたことを示している。もう、かれこれ十年余になるが、筆者は琉球歴史研究家のジョージ・H・ケア博士と共に八重山の文化調査に参加したことがある。その際、名蔵湾を始め、各地から2、3百キロに及ぶ青磁その他の破片を集めてきた。（それは現在琉球政府博物館とホノルル美術館に資料として保管されている）。それを、約1週間にわたって、小山富士夫先生に時代、及び窯の分類をしていただいたが、それによると殆どが明初期のもので、竜泉窯で焼かれたものであるとのことだった。わずかに南宋末から元初のもものが混っていた。これは、沖縄本島の各古城址から蒐集された青磁片にもほぼ同じことがいえるとのことで、前述の“球陽”の記録を立派に裏付ける鑑定でもあった」と報告している。

[4] 1969年10月17日付『沖縄タイムス』の新聞の「印花青磁、多量に出土—石垣島の名蔵湾の海底から」という見出しに続いて「石垣島の名蔵湾から観音堂におよび海底から青磁や白磁、印花がほどこされ高級品の皿類が多量に出土して注目されている。これまで沖縄の城跡や遺跡から出土する青磁類には、印花のほどこされたのはまれにしかなく一カ所から多量に出土するのは、珍しいケースである。印花には特色があり、鹿の模様に福の字のそえられたものや金玉萬堂の字の入ったもの、象型文字に似たものなどいろいろいる。最初の発見者は石垣島に住むバービリー宣教師。さる3月中旬に大山盛保氏（OK給油所社長）が所用で八重山に渡った際、バービリー宣教師の遺跡収蔵品の中で、これまであまり知られていない模様のはいつためずらしい青磁を見つけ、青磁が出土したという名蔵湾の浅瀬で多量に採集して文化財保護委員会に届けたものである。文化財保護委員会では使われた土の中に鉄分の多い黒い砂が含まれているので南方の磁器ではないかと考えていた。しかし、9月に知念勇氏が上京して東京（国立）博物館の文部技官長谷部楽爾氏に鑑定させたところ南支の窯で焼かれたものだということがわかった。文化財保護委員会の多和田真淳指導官の話—「同種のもものが一カ所で多量に出土することから考えると、琉球王府の官船が福建省から多量の磁器を積み、沖縄に帰る途中、ワコウの襲撃を受け名蔵湾に沈没したという事件も考えられる。15世紀から16世紀にかけて、ワコウが沖縄近海でひんぱんに出沒している時代である」と書かれている。

[5] 1975年5月30日 東京国立博物館『特別展観 日本出土の中国陶磁』（美術出版デザインセンター）の中の「中国陶磁出土遺跡一覧表」の「沖縄県」には「54番号、出土遺物＝青磁三足香炉、員数＝1口、時代＝明、出土地＝八重山諸島石垣島名蔵湾海中、所蔵者・保管者＝沖縄県立博物館」と記載されている。

[6] 1975年12月26日 筆者（大濱永亘）は砂川元島遺跡調査団の青山学院大学の三上次男教授一行（他に吉田章一郎・佐久間重雄・田村晃一ら各教授）と石垣島の各遺跡踏査を行い、その際に名蔵シタダル遺

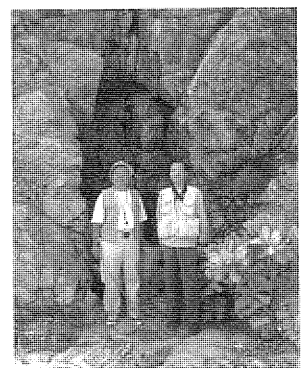
跡やクードー貝塚などを案内した。三上次男先生がクマダ浜の電信屋の跡地の地表赤土の断面の中に露頭している青磁の底部高台破片の1点を見て、この一帯には住居地（集落跡）があったようであり「港ではないか」と述べられた。

その点について、三上次男先生は「沖縄出土の中世中国陶磁について—中世沖縄と中国陶磁貿易の接点を求めて—」（『琉大史学』第8号、琉大史学会、1976年）の中で「（略）さらに八重山群島の石垣島の名蔵海岸でも同様に、広い湾岸の水辺には波に洗われた中国陶磁片があちこちに散らばっている。海浜における散布の密度が高いので、難破船から打ち上げられた陶磁片ではないかとの説もあったようだが、実際に踏査してみると中国陶磁片は陸地の腐植土層が波に洗われてできた海浜の低い崖の断面にも姿を現わしているから、これらはその昔海岸の住居あるいは部落で使われていた可能性が多い。このことは同じ遺跡から現地製の赤焼土器の破片が発見されることによっても傍証できる。石垣島を含む八重山群島から、どんなに多量の中国陶磁片が発見されたかは、10年ほど前、アメリカのジョージ・H・ケア氏が、僅かな時日の間に200-300キロにおよぶ青磁その他の中国陶磁片を表面採集したと伝えられているので判ろう（大城精徳「琉球の文化」創刊号頁39）。（略）」と述べている。

[7] 1978年6月 東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁器』（東京美術）の中の「中国陶磁器出土の遺跡一覧表」の「沖縄県」には「出土遺物＝白磁小皿・青磁三足香炉、員数＝白磁小皿4枚・青磁三足香炉1口、時代＝明、出土地＝八重山諸島名蔵湾海中、保管者＝沖縄県立博物館」と記され、また84頁には「296 青磁香炉 沖縄県石垣島名蔵湾採集 15—16世紀 高4.7cm」と写真が載っている。名蔵湾海中から出土した白磁小皿、青磁香炉の年代が15世紀から16世紀の明時代のものだということがわかった。

[8] 1974年～1978年にかけて、筆者（大濱永亘）がこれまで八重山諸島で採集した外来の古陶磁を陶磁史研究家の関口広次氏と共同調査・研究などを行ない、その成果を『物質文化 31』（物質文化研究会、1978年12月）の「八重山群島出土の古陶磁について」と題する共同論文を発表した。この共同論文の中の「1. 出土古陶磁の紹介」の項で「名蔵シタダル遺跡採集の7点遺物資料（青磁碗2点、白磁碗1点、白磁小皿4点）」を報告し、年代を15世紀後半～16世紀前半とした。（中略）

沖縄ではなかなか絶対年代を知り得るような資料は少ないのだが、ここで紹介した石垣島名蔵湾シタダル採取の青磁・白磁類等を著者らは一定期間の製品と考えている。名蔵湾シタダル海岸の青磁・白磁散布地は、大濱が20余年前に発見した所である。かつて、米俵10俵分以上の青磁類が採取され、島外に持ち出された。その後も米国・日本の数多くの学者が訪れている。この遺跡に対して各人各様の考えを持たれたことと思う。大別して（A）港とする説、（B）沈没船とする説、（C）台風などのため荷がこぼれたとする説、との3種に分けられるようである。著者らは諸説を踏まえ、たびたび現地を調査し整理した結果、港とする（A）説よりも、（B）説もしくは（C）説とする方がより妥当な説と考えるに至った。その理由として、①陶磁器の散布地は、長い名蔵海岸にあってもシタダルと俗称される4～500程の海岸や海底にのみあること。②シタダル海岸の周辺500m四方に確固たる遺跡が見当たらないこと。③散布している陶磁器は青磁・白磁・南蛮で、それも画一的なもの



挿図3 2008年8月シタダル浜にて著者と関口広次氏(右)

ばかりであり、また、生産用具である土器類がほとんど見られないこと。—通常、港である地域、例えば石垣島大浜海岸、西表島古見海岸そして鎌倉材木座海岸では生活用具の土器類も非常に多い—。④遺物は海中の中ほど、大形の破片が見られ、陸地に上るとまったく散布・包含していないこと。⑤港としての施設がまったく見当らず、また、港説を裏付ける直接的な文献・伝説がないこと。⑥この海岸付近は潮流も激しく、波も高く港としては不向きであること。等々の点からである。これらはいわば状況証拠であって、将来、本格的な水中調査を実施して詳細な点を明らかにしたいと願っている。しかし以上挙げた6項目から、まず沈没船もしくは大量の荷こぼれと想定され、ある一定期間の遺物と言える。」と共同研究の成果を発表した。

[9] 1979年3月 沖縄県教育委員会『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書—』（第22集）の中の「8. シタダル遺跡」の項で、「石垣市字新川野呂水1193、1145-52、1510-2、1557、1558、1583-50の地番に面する海岸から、海底に広がる遺跡である。名蔵湾に面する西海岸で俗称シタダルと呼ばれているところにあることからその名がつけられた。砂岩の割目をしたたり落ちるように流れるシタダルと呼ばれる小泉による呼称のようだ。このシタダル泉の位置する左右の砂浜から遠浅の海底面にわたって、おびただしい量の青磁、白磁が散在している。遺物散布の海底面の沖合への広がりについては未調査の段階である。海岸から沖合約200mの海底面から石斧が採取されている。石斧の石材は石垣島に産出しそうもないものようで注目を浴びている。同遺跡の遺物は、現在、県立博物館、石垣市教育委員会、石垣市立八重山博物館、先島文化研究所（大瀨永亘氏）で大量に保管されている」と書かれている。

[10] 1980年9月25日 沖縄県教育庁の招きで来島。10月25日まで1ヵ月間、ジョージ・H・カー博士、ダイバーの乾桂二氏、加藤芳雅氏の三氏が名蔵湾の通称シタダル浜と海底を含めての調査を行った。



挿図4 ジョージ・H・カー博士と著者

1980年10月25日、『八重山日報』の記事である「名蔵湾で中国沈没船調査 米国歴史学者カー博士グループ 200点の中国陶磁器を採取 約500年前の沈没船遺品？」の中で、「約500年前、沈没したと思われる中国船の遺品がドッサリ。9月末から八重山入りしていた米国の歴史学者、ジョージ・H・カー博士のグループが、史実を証明しようと22日から名蔵湾に沈む中国船の存在を調査。沈船は確認できなかったものの、青磁、白磁など中国の陶磁器200点を採取し、沈没という史実の可能性を強めた。これまでも何人かの手で磁器の採取が行われているが、採取箇所をチェックするなど本格的に調査したのは今回が初めてだけに、関係者の期待は大。同博士は採取した磁器のほとんどを八重山博物館に寄贈した。（略）調査箇所は、名蔵湾の通称クードー。シタダル海岸一帯と沖合200～700mの地域を対象とした。採取した陶磁器は、白磁の小皿25点、青磁の大皿、碗など125点、南蛮焼50点ほとんどが破片だがなかには完全な形の白磁があり、また24日に行われた仕分けでは、直径34cmの青磁の大皿、底が20・30cmの青磁でさらに大きな皿と推定されるものなど、多種類の陶磁器が採取された。さらに壽（寿）の印が押されたもの、サンゴが付着したものなどがあり、時代の推定も可能となりそう。カー博士は「沈船は発見できなかったが、数少ない碗が見つかるなど成果は十分にあった」と話しており、同博士が18年前か

ら同地域で採取した同様の陶磁器が2,000点以上にのぼっていることを含め、「中国船がこの付近で沈没したことは十分可能性があると思う。時代は明朝のころで、今から490～500年前の貿易船だろう」と、“沈没船説”を出張した」と記されている。また、『琉球新報』の1980年10月25日付で「名蔵湾の海底から陶磁器カー博士が採取 明時代の交易船遺物か 八重山博物館に寄贈」という見出しで同様の内容の記事が掲載されている。

なお筆者（大瀨永亘）は、その際の調査協力のお礼としての手紙を1981年8月9日付けでジョージ・H・カー博士から頂戴した。その内容は「私たちが石垣で再度お会いしてからもう1年近くになります。貴方の書齋で友人共々暖かいもてなししてくださったことに感謝します。（略）貴方の大規模なコレクションや首里博物館、石垣市立八重山博物館のコレクションは末永く探求する価値のあるものです。私たちは貴方がずっとこのお仕事を継続していることを知り、有り難く思っております（略）」等といった内容であった。

- [11] 1979年12月26日～翌年1月6日までの12日間の冬休みを利用して関口広次・谷川章雄・中沢富士雄の各氏と筆者（大瀨永亘）らは、共同研究で仲筋貝塚の学術調査を実施した。出土品等の整理作業は、発掘調査終了と同時に石垣市と東京とで1981年2月下旬までの1年2ヶ月間にわたって行った。この調査の結果は『沖縄、石垣島仲筋貝塚発掘調査報告』（代表・大瀨永亘 自費出版 1981年）で報告してある。その註で「シタダル海底遺跡」を紹介したので、以下に引用する。

「シタダル遺跡については、かつて筆者らが「八重山群島出土の古陶磁について」（『物質文化』（第31号、1978年）の中で15世紀後半～16世紀前半の一括遺物の好例として挙げた。1980年にはジョージ・H・カー博士らによって沈没船の探査が行なわれ、船体は発見されなかったが、海中より200点程の青磁類が引き揚げられた。シタダル遺跡からは顧氏銘をスタンプした青磁碗も最近、大瀨氏（筆者）によって採集されている。陳万里が指摘する様（『中国青瓷史略』1972年・『瓷器與浙江』1975年参照）に「顧氏」の年代が正統年間即ち1436年～1449年の間に活躍していた名工顧仕成の名に由来するのであるなら、こうした製品は当然、それ以降のものとなり、かつて私達の考えた年代観が補強されたと言えよう」と記述した。

- [12] 1982年3月『沖縄出土の中国陶磁（上）—ジョージH・ケア氏調査収集資料—先島編』（沖縄県立博物館）の中で、ジョージH・ケア氏は「I. 琉球における陶磁器物語」（訳：大城精徳＝沖縄県立博物館友の会々長、校閲：宮城悦次郎＝琉球大学助教授）の論文の中の「特別な問題と重要な遺跡」の項で下記のように報告している。

「（略）宮良川から島を横切って反対側に名蔵湾が横たわり、その長いクードー浜は東側の海岸になっている。名蔵川の河口に古代の集落跡がある。そこから南へ少し離れた所に、リーフや岩で守られ、浅い海域に面したシタダル浜という三日形の孤立した砂浜がある。1961年に調査団一行は、当時中学校の学生で、すでに熱心なアマチュアの考古学者になっていた大瀨永亘君に案内されて、はじめてこの場所へ行った。一見、非常に小さいこの砂浜にはうつぶせになった碗や皿の底（破片）がいっぱい埋まっていることがわかった。それらの破片は砂に洗われ、沖合の浅瀬でも水底に散らばっているのを見ることができた。その時と、その後のものを合わせて（*これまで）200個前後の白磁の小皿と、215（*25）個位の初期染付の磁器破片と共に4,000個以上の青磁片を発見した。重くて粗野だが焼き締められた南蛮

焼の壺の無数の破片も散らばっていた。これらは、おそらく、中国人が注意深くワラで包んだ青磁器を容れて、しばしば船で運んだ大型の貯蔵甕の破片であろう。これらの破片は、一隻の難破した16世紀初期の船からきたものに違いないと思われる。その船が中国船だったか、琉球船だったかは、今のところ知ることはできないが、これは重要なことである。その船は、おそらく名蔵村の投錨地に入るか出る途中で暴風におそわれ浸水沈没したか、あるいは座礁したかして、大波でシタダル浜に押し流されてきたものではないだろうか。それ以来潮流によってこれらの破片は散布されたものであろう。（*は、大瀨永亘が挿入・修正）

1962年に、小山富士夫教授は、クードー海岸を訪れ、後にそこから採集された214個の青磁片を分析し、その1片は宋代後期か元代のもの、5片は元代、196個もの破片が明代初期か中期のものとして鑑定された。12片は不明であった。そしてここに16世紀に島から島へと行商された貿易品の見本があるということになる。もし、シタダル浜海域か、その北のクードー海岸の沖の海中に、この船が難破した正確な位置を発見することが出来れば、残りの散乱していない大量なものが未だ泥やサンゴの中に埋没して残っている可能性もあり、またその中には破損されていない見本も含まれているかも知れない。（略）石垣市では、大瀨永亘氏が、個人としては最も貴重な考古資料や、歴史時代器物の陶磁片コレクションをもっているが、これは管理もゆきとどき丹念に整理されている。所蔵者は、この蒐集品が研究上価値と興味の点で県立博物館につぐ個人コレクションと理解している外国や他県からの専門的考古学者たちと、心よく協同研究をしている」と述べている。

また、ジョージ・H・ケア氏が先島諸島（八重山・宮古諸島）の各地域で採集した陶磁器類の内、中国等から得られた輸入された陶磁器を亀井明德氏（九州歴史資料館）が分類・整理し「先島諸島採集の輸入陶磁」と題する論文を発表した。その中の「I 各地採集地点の陶磁器」の「58 石垣島名蔵クードー海岸」の項で青磁、白磁、青花について触れ「クードー海岸の採集品は、明代前、中期と考えられる」と記載されている。

[13] 1985年7月5日から20日までの間日本水中考古学会（江上波夫会長）と朝日新聞社が共同で、名蔵シタダル海底遺跡での「沖縄石垣島海中発掘調査」（茂在寅男団長）を行った。沖縄石垣島海中発掘調査団はシタダル浜の前に二列の石灰岩を組み合わせた護岸のような構造物を発見し、調査の結果として船着場（港）ではないかと発表した。

名蔵シタダル遺跡の海中発掘調査について、各新聞紙上には調査状況やコメントが下記の小見出しで連日報じられた。その調査団員や協力者のコメント記事を日付順にまとめて下記に掲載する。なお報告書は2008年現在未完である。

1985年7月2日「4日まで準備を終える 石垣島の沖での海中発掘調査」『沖縄タイムス』

1985年7月3日「大がかりの海中発掘調査 名蔵湾内 交易史など究明 ロボットや先端技術も駆使」『八重山毎日新聞』

1985年7月3日「大陸・東南アジアと沖縄結ぶ“海の道”を解明 名蔵湾で海中発掘調査日本水中考

古学会 茂在団長ら来島」『八重山日報』には、「(略) 同調査は日本の歴史、文化などに大きな影響を及ぼした中国大陸や東南アジアと沖縄を結ぶ“海の道”を解明しよう、というもので、昨年11月に発足した日本水中考古学会の初の本格調査。調査団は茂在副会長を団長に沖縄県から高宮広衛沖国大学長、知念勇県立博物館主任学芸員、名嘉正八郎同学会沖縄支部長、さらに本土からは江上波夫日本水中考古学会会長をはじめ、岡崎敬、林尚吾、飯島幸人、亀井明德、国分直一、金子エリカ氏ら17人が参加する。また、八重山歴史研究会（森田孫栄会長）の協力も受ける。調査日程は、5日から8日まではダイバーが任意に選んだ海点での「概略探査」、9日から14日までは「精測発掘」、16日から20日までは同学会が初めて使用する三井造船が開発した最新の「遠隔操作水中ロボット（ROV）を使つての発掘調査」となっている。茂在副会長は「水中考古学会の作業は宝探しでなく、文化財保護が中心。遺物が乱獲されることを最も恐れる。発掘した遺物は貴重な財産であり地元で永久に残すことだ。この意味から遺物は全て市教育委員会に預ける」と語った。また同席した八重山歴史研究会の石垣久雄氏は「名蔵湾一帯の遺跡は青磁などが発掘されているが、今回の調査でより学術的なメスが入り、名蔵湾一帯の性格が解明できると思う」と述べ、調査結果に期待を寄せていた。日本水中考古学会は、海底や湖底の遺物や遺跡を調査、研究を目的に昨年11月に発足した。学会設立のきっかけは、55年から58年にかけて文部省の「科学研究費特定研究」として実施された長崎県の離島近海での元寇船の調査だった。去る3月には名嘉氏を支部長とする沖縄県支部も組織された」と記されている。

1985年7月3日「15世紀の中国の沈没船調査へ 日本水中考古学会 あすから名蔵湾で」『琉球新報』

1985年7月3日「“何が出るか楽しみ” 石垣沖海中発掘調査 調査団は、石垣入り」『沖縄タイムス』の中で「(略) 八重山歴史研究会の石垣久雄八重農高教諭らを伴い市内で記者会見した茂在副会長は「昨年11月に水中考古学会が発足して初の海中発掘。どのような遺物が見つかるか予測がつかないが、慎重に調査を進めたい。発掘物は現地保存が当然であり、その地域の文化研究に役立てるため石垣市教委に保管させたい」と抱負を述べた。また石垣教諭は「水中考古学という初の試みに大いに期待している。名蔵湾周辺からは青磁器がよく見つかっており、今回の調査でどんなものが出てくるか、楽しみにしている。発掘物は石垣に残すということであり、貴重な資料になるだろう」と期待していた。名蔵湾近くには15～16世紀のものといわれるシタダル遺跡があり、青磁器などが発掘されている。湾縁部からも青磁器が見つかることから難破船が沈んだのでは、という見方もあり、調査結果によっては八重山歴史の知らざる部分が浮き彫りにされる可能性もある。約15日間の調査は内外の注目を集めそう。「あくまでも文化財を守り、次の世代へ大切に伝えるのが目的」という茂在副団長らは、遺物を扱うダイバーの指導も重要だとして、この日さっそくダイバーを集めて講習会も開いた」と記載されている。

1985年7月4日「“海の道”へ夢広がる 石垣島沖海中発掘いよいよ明日から」『朝日新聞』

1985年7月5日「海岸線に中国製？陶磁片 遺物の宝庫裏づけ 石垣島沖海中発掘本格調査前に早くも」『朝日新聞』

1985年7月6日「名蔵湾海中の調査開始 日本水中考古学会 初日はポイント設置」『八重山毎日新聞』

1985年7月6日「社説 名蔵湾の海中調査に期待」『八重山日報』

1985年7月6日「日本水中考古学会 名蔵湾の調査始まる きょうからダイバー投入」『琉球新報』

1985年7月6日「石垣沖海中発掘 概略探査始まる 日本水中考古学会 調査地点を設定 測量班、ダイバーら10人」『海中遺物の提示など協力求める』『沖縄タイムス』

1985年7月7日「本格調査始まる 石垣沖海中発掘 破片などを発見」『沖縄タイムス』

1985年7月7日「次々に陶磁器破片 石垣島で海中の様子を探査」『朝日新聞』

1985年7月14日『沖縄タイムス』に「青磁 白磁などを発見 日本水中考古学会の石垣島沖海中発掘調査 船着場？ 多数の遺物 中国と古いつながりの跡」という見出しで「6日に石垣市名蔵湾で始まった日本水中考古学会（江上波夫会長）と朝日新聞社による石垣島沖海中発掘調査は順調に進み、13日までに200点近くの青磁、白磁、甕（かめ）の大小片、完形品が見つかった。また、二列のサンゴ石灰岩を組み合わせた護岸のようなものも見つかり、関係者は「港か、あるいは船の仮宿泊地であったかもしれない」とみている。大小片や完形品はいずれも中国・明代初め以降14世紀ごろの物といわれ、この地が八重山と中国の古いつながりの跡だったことが明らかになりつつある。ダイバー十数人が加わる調査は6日に始まった概略探査に続き、9、10両日の準備作業を経て11日から精測発掘は、名蔵湾・シタダル浜の海岸線50mをベースに百m沖までの海中で行われ、細かい“番地”ごとに遺物を一個一個確認、採取していった。海底表面の遺物を取った後、13日からは一部場所での海底中の採掘も開始された。この精測調査は14日で終わり、16日からはROV（水中ロボット）による調査が始まる。（略）調査団の茂在寅男団長、国分直一梅光女学院大教授、金子エリカ早大講師らは、ダイバーと一体となった徹底した調査を高く評価、「感服するほどの水中報告書ができつつある」（茂在団長）と喜んでいる。遺物の正確な鑑定などこの一帯の歴史的意義はこれからの研究をまつことになるが、茂在団長、国分教授らは「明代初めの物とみられる。中継貿易があったと思われる。この地は船着き場にも適していたのでは」「破片が多いのは、割れた物が投げられたのではないか。それと、台風などによって遺物は何回も岸と海を往復したと思われる。どのくらい遠く流されたかを知るにも意義がある」など評価している。この日、八重山歴史研究会の森田孫栄さん（市文化財審議委員長）、石垣久雄さん（八重農高教諭）らが現場を視察。森田さんらは「各地の陸上からは多くの青磁類が出土しているが、あるいは名蔵湾のこの地から分散していったのかもしれない」と感想を語っていた」と記されている。

1985年7月14日「200点の遺物を収集 護岸から防波堤の遺構も発見」『八重山毎日新聞』

1985年7月14日「“沖縄は文化の玄関” 水中考古調査 青磁など多数発掘 名蔵・シタダル」『八重山

日報】

1985年7月15日「清水あれば波止場あり“シタダル”は水辺だ 石垣島沖発掘調査地名からナゾ解き」
『朝日新聞』

1985年7月15日「白磁の皿など採集 日本水中考古学会調査団 中国交易を裏付ける石垣・名蔵湾」『琉球新報』では「(略) これは13日午後、調査団の茂在寅男団長や調査に参加している国分直一、金子エリカさんが記者会見で発表したもので、引き揚げられた青磁、白磁片の大半が15世紀ごろのものと見られ、中国との交易が裏付けられる大事な資料となるという。国分さんは、遺物が散布状態で見つかることやダイバーが名蔵湾北側サンゴ礁の港らしい跡があること、砂浜一帯で比較的海岸に近いところに多いことなどから「港に入った船や台風などで避難した船がローリング、ピッチングで割れた青磁、白磁の器を海岸に捨て、それが台風時の大波に洗われて海底に運んだので散布状に見つかる。磁器片の中には風触をうけたものがある」と推察している (略)」と書かれている。

1985年7月16日「遺物291点を収集 名蔵湾の発掘調査 護岸の遺構も発見 日本水中考古学会精測発掘作業終わる」『八重山毎日新聞』

1985年7月16日「水中ロボット探査へ シタダル遺跡 新しい発見に期待 茂在団長ら中間報告 青磁など291点収集」『八重山日報』には「(略) 海岸線と平行に45mのサンゴ石灰岩で積みあげられ、四段で高さ1.3mの構造物も発見した。これについて国分教授は「おそらく船着場で素朴な接岸地であつたのではないかと語った。さらに青磁や白磁について亀井明德氏は「中国・福建省にあり明代の『処州窯』で焼かれた可能性が強い」と述べ、中国との交易を知る貴重な資料とした。この日、那覇市から駆けつけた日本水中考古学会沖縄県支部の名嘉正八郎支部長は「沖縄支部として初仕事。これを機会にいい仕事をしていきたい」と語った (略)」と記載されている。

1985年7月16日「船着場の遺構発見 青磁など291点引き揚げる 名蔵湾海底発掘調査」『琉球新報』の中で「(略) 15日午後調査団の茂在寅男団長、名嘉正八郎県支部長 (県博物館学芸員) ら関係者が立ち会いで調査の中間報告を行った。(略) 調査メンバーの知念勇さんは、こんど引き揚げられた遺物のほとんどが15世紀半ばオヤケアカハチ時代のちょっと前のもので、土や上薬の状態から中国福建省あたりの処州窯でつくられたものと見ており「20年前に米国の考古学者・ジョージ・H・カー氏が名蔵湾を調査、採取して県博物館、八重山博物館で保存している青磁、白磁の皿類と同種のもの」といっている。国分直一さんは調査地域海底の状況について「ダイバーの調査によると海岸に沿った4、5mの海中に約30mの原始的な石積みが見つかり総長45m、ある部分で4段に積まれたところもある。高い所は1.3mくらい。近くに水補給に重要な水場 (泉) もあり総体的に見て船着場だったことはほぼ間違いない」と語った」と書かれている。

1985年7月16日「遺物大半が中国のもの きょうから水中ロボット探査 金属類はみつからず 今後

形状など把握 石垣島沖海中発掘調査』『沖縄タイムス』

1985年7月17日「今晚の話題 南海のロマン」『沖縄タイムス』

1985年7月20日「石垣島海中調査終える 陶磁器片291点を回収」『朝日新聞』

1985年7月21日『八重山日報』の「シタダル遺跡 海中発掘調査おわる 名蔵湾沖合 船着場遺構など注目 茂在団長記者会見“文化流入の玄関口”」という小見出しに続いて「日本水中考古学会（江上波夫会長）と朝日新聞社が共同で、去る5日から実施した名蔵シタダル遺跡での「沖縄・石垣島海中調査」（茂在寅男団長）は20日、水中ロボット（ROV）探査を終え、全日程を終了した。その間、調査にかかわった関係者ダイバー述べ170人余、学者15人、ROV関係6人と大がかりなもの。現在、採集した青磁、白磁、南蛮がめなどの破片遺物291点は石垣市教育委員会で保管。今後、永久保存のための脱塩処理、年代測定、製図などの歴史的調査を行い、日本水中考古学会では2年後をメドに最終的な報告書にまとめあげるとしている。遺物は最終的に市立八重山博物館に寄贈の計画でいる。（略）沖縄石垣島沖海中発掘調査は中国大陸、東南アジアと沖縄を結ぶ交易ルートを解明しよう、と去る5日から概略調査、9日から精測発掘を行った。そしてこの間、青磁や白磁、染めつけの陶磁器類の大小、および南蛮がめの破片など291点の遺物を採集。さらに船着場跡といわれる“遺構”の発見もあり、きわめて貴重な調査となった。（略）全日程を終了したことで20日、記者会見した茂在団長は今回の調査について①遺物は、郷土の財産として永久に保存し石垣島の歴史解明の資料に利用してもらいたい②遺構が発見されたことは、諸般の事情から名蔵湾のシタダルは、水を運ぶ船の接岸地であったのではないかと③名蔵湾は文化流入の“玄関口”であったことは否定できない④調査は水中考古学として入門段階のもの。今回はダイバーの綿密な記録に感服—と締めくくり「今後、地元研究者の調査研究の糸口になれば幸い」と述べた。また、この日、同席した市教委社会教育課の文化財担当員で日本水中考古学会沖縄支部の会員である阿利直治氏は「シタダル遺跡は、青磁、白磁、南蛮陶器が主流。それも、15世紀初頭から50年間に集中していることが注目される。時期的には、はっきりしないが、遺構の発見は今調査の大きな収穫」と語った。なお、今後は二次調査で脱塩処理、形状の正確な把握、写真撮影、製図作成を行い、調査結果は報告書にまとめられる」と、述べた。また『沖縄タイムス』（7月21日）には「沖縄は文化の流入口 名蔵湾水中発掘調査終わる 茂在団長記者会見 船着場遺構を新発見」の小見出しで、ほぼ同様の内容の記事が掲載された。

[14] 1985年8月8日（木）八重山文化研究会（会長牧野清）の定例会で、筆者（大濱永亘）が「名蔵湾のシタダル遺跡—沈没船について—」というテーマで「1. シタダル浜を中心に青磁碗、皿、盤、白磁小皿、少数の染付（青花）、南蛮陶器などの貿易陶磁が膨大な量採集される。特に青磁碗や白磁小皿が多い、2. 歴史環境、3. 学史、4. 中国製陶磁器出土状況について、5. 船着場遺構について、6. 遺物の年代について」（レジュメ）と、項目ごとに発表した。

[15] 1985年8月19日『琉球新報』には「いつの時代の石積み—日本水中考古学会による石垣島での海底発

掘調査が7月5日から20日まで行われ、15世紀ごろの青磁や白磁の皿、おわん、南蛮がめの破片など290余点が発見された。中国との交易を裏付ける資料として大きな成果と、関係者は注目している。その調査の中で石積みの遺構が発見された。「原始的な石の積み方、近くに水補給に重要な水場（泉）もあり、総体的に見て石船着き場だったことにはほぼ間違いない」と断定的な見方で注目された。ところが、お年寄りたちから「あれは、戦前、御木本真珠会社が養殖場に築いたものでは……、その仕事をしていたので記憶にある」との“証言”があり、地元の関係者は「どうなっているの」と首をかしげている」と記されている。

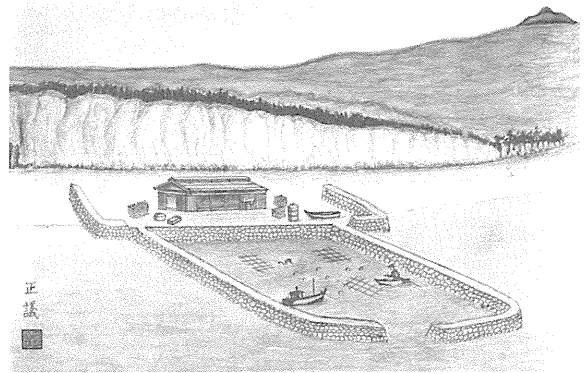
筆者は早速上記記事をコピーして、日本水中考古学会考古学の沖縄石垣島海中発掘調査団に参加メンバーの方々に送付した。8月24日付けで國分直一先生や金子エリカ先生から「ありがとうございます。ミキモトの真珠養殖施設があったとのことをすぐに茂在先生へお知らせしました。とんでもない想定をするところでした。御教示厚く御礼申し上げます」という返礼の手紙を受け取った。

[16] 後日、沖縄石垣島海中発掘調査団の茂在寅男団長（日本水中考古学会副会長）から筆者（大瀨永亘）へ「沖縄石垣プロジェクト連絡事項（1985、6、25）、1985年よりの沖縄石垣島沖海底調査に関するその後について（1986年6、6）、1985年沖縄石垣島沖海底調査における調査団長手記（まえがき、〔基本構想〕水中考古学「石垣島プロジェクト」について、調査作業経過まとめ）と同封で、「沖縄石垣市沖海中中間報告 茂在寅男 An Interim Report of the Underwater Archaeological Investigation at the Beach of Ishigaki, Okinawa by Torao MOZAI」などが送られてきた。英語での中間報告は下記のように翻訳した。

「古代の村が名蔵川の河口にあるとジョージ・カー氏は彼のレポートで述べている。そのちょっと離れた南には、リーフと岩で護られた浅い流域に面した小さい三ヶ月形の砂地にシタダルビーチと呼ばれるところがある。1961年に石垣中学校のすでに立派な考古学少年であった大瀨永亘君に、調査団メンバーはその場所に案内された。その小さなビーチには碗や皿が波に洗われてころがっていた。重たいざらざらした壺の破片がごろごろあった。これは丁寧にわらで包装された中国の貯蔵用の壺に違いなかった。これは16世紀の難破船のものである。（略）この調査で九州歴史資料館の亀井明德氏と沖縄県立博物館の知念勇氏がカー氏と一緒に調査を担当した。このカー氏の沖縄での仕事は今でも高く評価されている。1984年6月2日に筆者はカー氏から思いがけず手紙を頂いた。同様の手紙が早大講師金子エリカ氏にもあった。手紙と一緒にシタダルビーチの海洋考古学的プロジェクトというノートが同封されていた。彼との何回も交流した後、筆者はこの調査を日本水中考古学会と一緒に推進することに決定した。朝日新聞が後援してくれた。

調査は、1985年の7月3日～19日まで行われた。15名の学者と28人のダイバーと地元の数名のメンバーと朝日新聞のスタッフが参加した。幾多の困難を乗り越えて最初の調査は成功裏に終わった。16世紀に中国から運ばれた陶磁器の遺物が水中から291点収集された。これは、このプロジェクトの第一段階の仕事で、調査団は近い内に第二段階の仕事をする事になっている。つまり、これらの遺物を考古学的考察や年代、出所地の決定などをやり、まとめのレポートを出版することである。これは名蔵湾のシタダルビーチの調査の中間報告である（略）」という内容で書かれている。

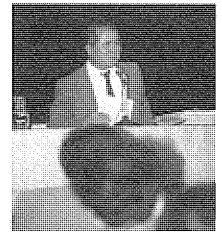
[17] 1987年4月7日「絵でしのぶ大田正議の我が島展 (11) の大正3年ごろの御木本真珠株式会社名蔵湾真珠養殖場全景」があり、「名蔵湾にあった御木本真珠養殖場」『八重山毎日新聞』の見出しに続いて「大正3年に名蔵湾クードゥ電信屋の南の「シタダリ」近くに石積みの小湾を築き、養殖場とした。海岸は埋め立て、事務室と従業員の宿舎が、トタン葺屋根1棟建てられた。湾内で真球が養殖され、海女も三重県の志摩から2、3名来ていた。地元では、男子従業員と責任者の竹内久吉氏が事業を担当して行った。毎年襲い来るすごい猛烈な台風で家は吹き倒され、積み上げた石垣の積石は打ち壊され、散乱する被害も2、3度ではなかった。真珠等も傷みつけられ、莫大な損害をこうむるばかりだった。そこで、意を決し、遂に川平湾に移動して養殖業を続け、今日に至ったのである」と記載されている。



挿図5 大正3年頃の御木本真珠養殖場の全景画（八重山博物館『絵で偲ぶ大田正議の我が島展』1987年より）

[18] 1990年11月27日 第一発表者 大瀨永亘（八重山商工高校教諭）「琉大史学会へむけて（1）、名蔵シタダル遺跡について」（『八重山毎日新聞』、琉球大学史学会）の八重山大会の発表内容の中で「名蔵シタダル遺跡は、石垣島の西海岸、名蔵湾の南東側一帯に位置する。シタダル浜を中心にして、クマダ浜からクードー浜にかけての海岸や海底に広がる遺跡である。「シタダル」とは、岩と岩の間から水がしたたり落ちる地形のようすから名づけられた地名である。かつて、この地で御木本幸吉が真珠を養殖していた（大正3年5月着手）、漁民はこの一帯をヒンクンヤー（真珠の家）とも呼んでいる。1985年7月、日本水中考古学会と朝日新聞社が共同で「沖縄・石垣島海中発掘調査」を行い、名蔵シタダル遺跡を調査した結果、ここを中世のスク時代の文化流入の玄関口と断定し、また、調査の際発見した二列の石積みの遺構を中世のスク時代の船着場（港）としたことには問題がある。中世のスク時代の船着場であれば、近くに流水や湧き水があり、飲料水の補給ができる条件が必要である。しかし、シタダルのため水は、岩と岩の間から垂れた水を溜めた水であり、水を一汲みするとすぐになくなってしまいうほどで飲料水の補給が全くできない。また、西向きで潮流が早く、北から風をまともに受け、冬の期間は港に不向きである。さらに、港には、停船、滞在、休憩、食事、風待ち、交易するために多くの人々が入り出るので港一帯には、残滓や地元の土器片が必ず比較的によく発見される。また港の近くや後背地には消費地域の大規模な中世集落跡がある。しかし、名蔵シタダル遺跡からは、残滓や地元の土器片や中世の大規模な集落等も全く発見されない。故に名蔵シタダル遺跡は中世のスク時代の船着場（港）でもなく、従って文化の玄関口でもない。また、名蔵シタダル遺跡の年代については、かつて『沖縄、石垣島仲筋貝塚発掘調査報告書』に述べたように、15世紀後半から16世紀前半だと考えられる。また、名蔵シタダル遺跡から出土する大量の中国製の貿易陶磁は、沈没船によってもたらされたものなので、当然一括遺物として、当時生産され、消費されていたと考えられる」等の内容を紹介し、「琉球大学史学会の八重山大会」の発表会へ参加を呼びかけた。

- [19] 1990年12月1日（土）第24回琉球大学史学会八重山大会（琉球大学史学会）・会場：石垣市立図書館2階視聴覚室、筆者：大瀨永亘（八重山文化研究会員）は、「名蔵シタダル遺跡について」というテーマで上記内容を改めて発表した。



挿図6

- [20] 1990年12月2日『八重山日報』の「研究成果を6氏が発表 琉大史学会 考古、民俗など豊富な研究シタダル遺跡は沈没船など」という小見出しに続いて「琉大史学会は、昭和43年に発足。会員は現在、同大学史学科卒業生と賛同者で構成され600人に及ぶ。研究成果は『琉大史学』で披露している。発表は、最初は大瀨氏が「名蔵シタダル遺跡について」と題し発表。遺跡の性格、形成に迫った。同遺跡は1985年、日本水中考古学会により調査が行われている。大瀨氏は、遺跡名について「水がしたたり落ちる、との意味から名付けられた」とした上で「遺跡は、沈没船によって形成されたもの。港としては不向きである。港であるならば、周辺に港に関連するものがあるはずである。遺跡は15世紀後半か16世紀前後に形づくられたものであろうと強調した（略）」との内容が掲載された。また『八重山毎日新聞』にも同様の記事が載せられた。

- [21] 1990年12月15日 筆者（大瀨永亘）は1990年12月1日に『第24回琉球大学史学会八重山大会』（石垣市立図書館）で発表した内容を冊子にまとめ『名蔵シタダル遺跡について』（先島文化研究所）と題して100部印刷して配布した。

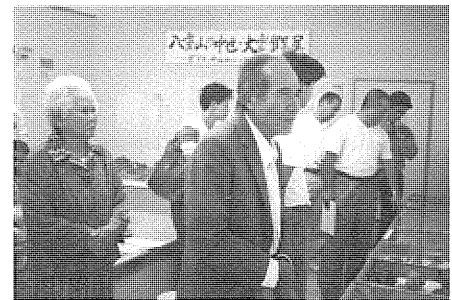
- [22] 1992年9月4日『琉球新報』に外間正幸元沖縄県立博物館長が「ジョージ・H・カー博士を悼む一生 涯沖縄に深い愛情」の哀悼を寄せ「8月28日、ジョージ・H・カー博士がハワイの病院で逝去された。80歳だった。沖縄にとってまことに惜しい人を亡くしたと思わずにはいられない。（略）私がカー博士に初めてお目にかかったのは、1960年の1月26日である。その次は同年の7月6日、カー博士がホノルル美術館から派遣され沖縄の民俗の調査を博物館でなされた時である。幸いに米国の大学を出た大城精徳主事と一緒に、カー博士の調査に協力したので博士も喜ばれ、以来私どもは長く親しくしていただいた。それから、同年8月の中旬には日米琉合同学術調査のために来沖され、博物館を拠点に約3ヵ月間、沖縄本島および宮古・八重山・久米島などの各遺跡の調査を行った。この時の調査で、私はカー博士と日本語の達者なサイデンス・テッカー氏（米国の作家で日本文学研究家）に同行し、3人で田名家を訪問して田名文書を見せていただき、また八重山では各地の遺跡を見て回った。八重山の調査は1962年の11月中旬にも行われ、その際にも私は同行し、遺跡や各地の海岸から多数の陶磁器と一緒に採集した。カー博士は翌年の4月中旬、陶磁器鑑定の権威者小山富士夫氏を沖縄に招へいし、これらの採集陶磁片2万点余を、博物館で小山氏に鑑定してもらい、それらの全部を博物館に寄贈された。その後、1979年5月、当時琉球大学の田昌秀教授がハワイを訪問した際に、カー博士の沖縄調査資料を博物館に寄贈させたいと思いカー博士に伺ったところ「整理のため再度現地を確認したいので、その旅費を沖縄側で負担してもらえないか」との相談を受け、大田教授は帰沖後の10月に早速、博物館に来館された。博物館では直ちに皆に諮って予算獲得に努力し、翌年2月予算が可決された。比嘉幹郎副知事の配慮もあって準備

が整い、7月に前田功教育長からカー博士あてに招聘状が送られた。その間大田教授や宮城悦次郎教授の協力のお陰で、9月中旬にカー博士が来沖された。途中、10月15日には教育長主催の歓迎会が、ハーバービューホテルで催された。そして9月下旬に八重山調査も済み、無事帰米された。翌年（1981）カー博士は、沖縄での手厚いもてなしのお礼にと、博物館や琉球大学など5施設に沖縄関係の所蔵資料4千点余も寄贈されたのである。同年8月24日に博物館で、ストラウス米総領事から比嘉副知事に目録が手渡された（略）」と記載されている。

[23] 1993年11月1日～14日南島民俗資料館『八重山の中世・大密貿易展—密貿易の中継地であったスク時代の八重山—』場所：南島ギャラリー、特別協力：先島文化研究所（資料提供）、ちらして展示会への参加見学を呼びかけた。名蔵シタダル遺跡から出土した3,000点以上の中国製の貿易陶磁が初めて公開され大好評を得た。

会場には以下の遺物・資料が展示された。

- (1)名蔵シタダル遺跡から採集した中国製の舶載陶磁器など（青磁、白磁小皿、南蛮陶器、染付）
- (2)石垣島の仲筋貝塚からの出土遺物
- (3)石垣島の元椶海村遺跡から採集された中国製の舶載陶磁器など
- (4)北方文化の遺物の類須恵器や勾玉・丸玉（ガラス玉）など
- (5)八重山のスク時代の鉄器について（砂岩製の鞆の羽口、土製鞆の羽口、埴塙、鉄滓）
- (6)八重山のスク時代の文献資料など（調査報告書、論文など）



挿図7

[24] 1994年12月2日『琉球新報』のコラムで、筆者（大濱永亘）は「落ち穂—カー博士との出会い」という小見出しに続いて「ジョージ・H・カー博士と最初に出会ったのは、1961年、私が中学3年の時である。日・米・琉の総合調査による琉球古文化財調査のため来島。名蔵シタダル遺跡を案内したら、一带から膨大な量の中国製の貿易陶磁が採集されるのに感動された。翌年、考古学者リチャード・ピアソン、歴史研究家大城精徳氏らとともに来島。シタダル遺跡を再調査し「交易船が沈んでいるのではないかと述べられた。そしてさらに1980年9月には、ダイバーの乾桂二、加藤芳雅氏らをつれて来島。共同研究による名蔵シタダル浜一带の学術的な海中発掘調査を約束したが、残念ながらこれは実現しなかった。名蔵シタダル遺跡は、石垣島の西海岸、名蔵湾の東南海岸のシタダル浜を中心にして、クマダ浜、クードー浜にかけて海岸や海底に広がる遺跡である。その後も数多くの学者をシタダル遺跡へ案内したが、それぞれ沈没船とする説と港とする説に分かれた。私は、1974年から78年にかけて陶磁史研究家関口広次氏と共同研究したが、カー博士が言うとおりの沈没船とする説が妥当と考えた。1985年、茂在寅男氏を団長とする日本水中考古学会と朝日新聞社が共同で海中発掘調査を行った。発見者の私は、なぜか調査団に加わるができなかった。調査の結果、調査団は、二列の石灰岩の構造物を中世の船着き場（港）ではないかと発表した。1987年3月「絵で偲ぶ大田正議の我が島展」が開かれた。展示画にシタダル浜の御木本真養殖場の全景画があった。調査団が中世の船着き場でないかと推測したものは、大正初期の真珠養殖場跡だったのである。漁民はこの一带をヒンクンヤー（真珠の家）と呼んでいる。この遺跡から

採集される膨大な量の中国製の貿易陶磁は、カー博士の言うとおりに沈没船によってもたらされたもので、一括遺物として当時中国で生産、消費されていたものである。8月28日は、カー博士の3年忌であった。非常に高名な学者だったが、民主的で、私のような者にも親切で良き理解者であった。ご冥福をお折りしたいと思う」と記した。

[25] 1994年12月 筆者（大濱永亘）は「名蔵シタダル遺跡について」を「沖縄考古学会創立25周年記念特集号」として企画された『南島考古』（第14号 沖縄考古学会）に掲載した。それは『第24回琉球大学史学会八重山大会』（1990年12月1日 石垣市立図書館）で発表した内容を再吟味してまとめたものであった。

[26] 1999年 筆者：大濱永亘は『八重山の考古学』を自費出版した際に、高宮廣衛沖縄国際大学名誉教授から「本書は八重山考古学界の財産」という序文をいただいた時「この遺跡は沈没船で海底に広がる遺跡だというご指摘をうけたので、この機会に遺跡の名称を名蔵シタダル遺跡から“名蔵シタダル海底遺跡”」に訂正した。

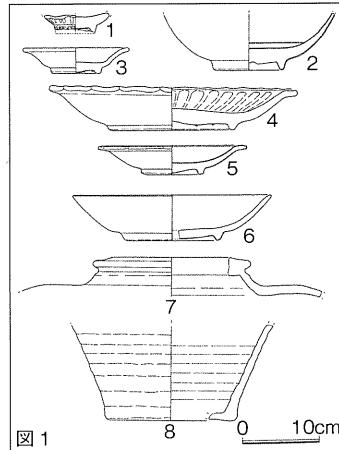
[27] 1999年10月1日 筆者（大濱永亘）は『八重山の考古学』（先島文化研究所）の出版に当たって「Ⅲ 名蔵シタダル海底遺跡について」として前掲論文を転載した。なお2000年6月、親子で「第3回日本自費出版文化賞」（主催・日本グラフィックサービス工業会）の大賞に、大濱永丞「大濱永丞私史—八重山『濱の湯』の昭和—」（個人誌部門）と筆者（大濱永亘）の『八重山の考古学』（地域文化部門）が選ばれた。

[28] 1999年12月17日『沖縄タイムス』の「考古資料六千点寄贈 カー博士のコレクション ハワイから県立博物館に」という小見出しに続いて「県立博物館（大城将保館長）は16日、中国青磁器など琉球列島遺跡調査で採集され、ハワイ・ホノルル博物館に収蔵されていた「ジョージ・H・カー コレクション」の考古資料約六千点が、このほど県へ寄贈されたと発表した。県立博物館では「学術的に極めて貴重な資料。年次的に資料の整理、分類を行い、目録作成や企画展で紹介していきたい」としている。来年1月ハワイ沖縄移住百周年を迎えることから、ホノルル側が歴史研究家の故カー博士の遺志を尊重し、今回の“里帰り”となった。コレクションはカー博士が琉球列島遺跡調査（1960—62年）の際、採集したもの。採集は県内144遺跡にまたがり、139遺跡は宮古・八重山諸島の資料で沖縄諸島は勝連、浦添、首里城など主なグスクだけとなっている。主な資料は石垣市名蔵のクードー海岸（シタダル遺跡）で採集された碗（わん）、皿、盤など。制作年代は明代に集中し、14から15世紀にかけ、製作されたものが多い。」と書かれていた。また『琉球新報』にも「カー・コレクションを寄贈 ホノルル美術館→県立博物館 14、15世紀の陶磁器など6,000点 来年以降に公開予定」という小見出しで、ほぼ上記内容と同様の記事が掲載されていた。

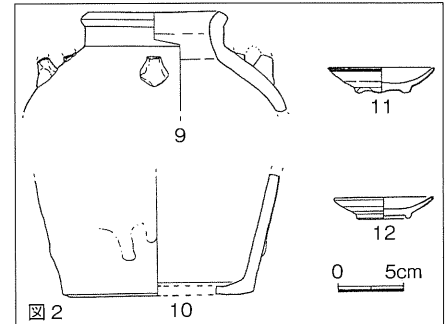
[29] 2004年3月 宮城弘樹・片桐千亜紀・新垣力・比嘉尚輝「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査—海洋採集遺物からみた海上交通—」『紀要沖縄埋文研究』第2号（沖縄県立埋蔵文化財センター）の「f 地点（名蔵シタダル遺跡）15世紀中頃」の中で「沖縄県内で最も多くの資料が採集され、

大瀨永亘氏によって報告される著名な遺跡である（大瀨 1994）。当該資料の大部分は先島文化研究所に2,342点保管されている（大瀨 1999）。他にも、日本水中考古学会によって調査された遺物が石垣市教育委員会に保管されているとのことだが、今回は確認できなかった。また、ジョージ・H・ケアによって採集された遺物が沖縄県立博物館に保管されており、これらは既に多方面で紹介されている（沖縄県立博物館 1982）、同様の資料

が八重山博物館に保管されているので、今回はこの八重山博物館の保管資料を紹介する（図1～2）。1は小形の碗で片切り堀りによる蓮弁文で施される底部資料である。2は大形の無文外反碗の底部資料で、高台の削り出しは浅く腰が張る。3～6は盤で、大小・器形にバリエーションが認められる。3は腰が張り、外反口縁を呈する。4・5は稜花盤で、大型で内面に幅広の蓮弁文を施すもの4や無文のもの5がある。6は無文で直口縁をもつ。7・8は中国産の褐釉陶器で首里城などによくみられるタイプのものである。9・10は褐釉陶器壺で、縦耳の付くナデ肩器形である。11・12は森田分類D群（森田 1982）で挾高台のものと、切り高台にならないものがある。これらの資料群は首里城京の内S K01（金城ほか 1998）の類品を多く含み15世紀前半から中葉頃を中心とした年代観が妥当と考えられる。」と記載されている。



挿図8-1



f 地点（名蔵シタダル遺跡）表採遺物（沖縄県埋蔵文化財センター「沖縄埋文研究2」2004年、図4より）

挿図8-2

図1

[30] 2004年5月31日 宮城弘樹「海に沈んだ貿易陶磁」『グスク文化を考える—世界遺産国際シンポジウム＜東アジアの城郭遺跡を比較して＞の記録』（沖縄県今帰仁教育委員会編、新人物往来社）の「シタダル遺跡」の項の中で、上記とほぼ同様の内容が書かれている。

[31] 2005年 大坪聖子「貿易陶磁から見た琉球沖縄における東南アジア文化の受容—南西諸島出土の沈船資料を事例に一」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第50輯・第3分冊の「南西諸島出土の東南アジア陶磁」の項で、名蔵シタダル海底遺跡について、触れられている。

[32] 2005年3月 宮城弘樹・片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査（Ⅱ）—海洋採集遺物からみた海上交通—」『紀要沖縄埋文研究』第3号、（沖縄県立埋蔵文化財センター）の「第2表遺跡・遺物散布地一覧（2004・2005報告）」で「f 地点—発見場所＝名蔵湾、確認資料＝船載陶磁器、年代＝15世紀中頃、保管場所＝先島文化研究所・石垣市教育委員会・沖縄県立博物館等々」と記載されている。

[33] 2005年8月 アジア水中考古学研究所のホームページ「水中考古学の歴史」の「2. 日本における水中遺跡調査の歩み」の項中、石原渉がシタダル遺跡を紹介されている。

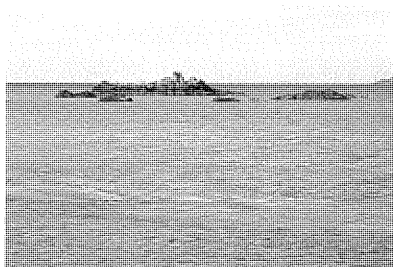
[34] 2008年2月17日筆者：大瀨永亘は「八重山諸島における交易の展開史」というテーマで（沖縄八重山文化研究会の2月月例会、場所：沖縄県立芸術大学）発表した。その中で「シタダル浜の海岸や海底からは青磁、白磁小皿、褐釉陶器など数千点に及ぶ膨大な量の中国陶磁とまた数十点の染付（青花）も出土しているが、それらは沈船の積載品であったと考える。中国福建沿岸海商らが、八重山の歴史的な事件1500年オヤケアカハチ・ホンカワラの乱（スク文化期後期）ころに、海禁政策を犯して交易物産（海巴＝宝貝、螺殻＝夜光貝、牛皮、苧麻衣＝上布）などを求めてジャンク船で八重山諸島へたびたび来島した。そうした私貿易船の一艘が八重山の島々を航行中に時化や台風などによって石垣島の名蔵湾のシタダル岬で沈没したものと推定される」と発表した。

[35] 2008年3月21日 金武正紀「八重山における貿易陶磁器」『石垣市史考古ビジュアル版 第5巻 陶磁器から見た交流史』（石垣市総務部市史編集課、監修：石垣市史編集委員会＝考古小委員会・金武正紀・石垣久雄・崎山直・石垣博孝、石垣市）の中で「(5) シタダル海底遺跡（石垣島）出土の陶磁器」との記述がある。

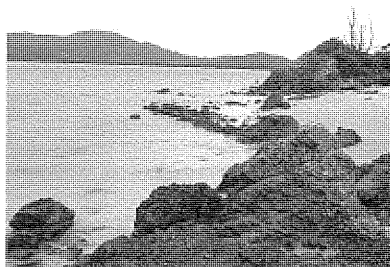
[36] 2008年10月27日発刊 筆者：大瀨永亘は「八重山諸島の交易—スク文化期を中心に」（『日流交易の黎明—ヤマトからの衝撃』谷川健一編 森話社）の「4—交易の旺盛（スク文化後期）」の中で「(略) 石垣島の西海岸にある名蔵湾のシタダル海底遺跡からは、15世紀後半から16世紀前半ころの中国製の貿易陶磁（青磁、白磁小皿、褐釉陶器、染付など）が、浜辺から海底にかけて広がって数千点という膨大な量で出土している。これらの中国製の貿易陶磁も、中国福建沿岸海商らの船（明の私船、ジャンク船）によって持ち込まれたものが、船ごと沈没したものと考えられる。明国との民間レベルの私船による私貿易・密貿易は定着していたことがわかる」と述べた。

[37] 2008年11月1日発行 関口広次は「福建省邵武市四都窯址について—割高台白磁小皿の生産窯址—」（『陶説』通巻668号 2008年11月号 日本陶磁協会発行）の中で、これからの共同研究で発刊される名蔵シタダル海底遺跡採集陶磁器の報告書作成の調査の一環として割高台白磁小皿の生産地と目された福建省邵武市四都窯址のフィールド調査をし、その成果を簡単に報告している。

3. 名蔵シタダル海底遺跡における中国製の貿易陶磁の散布状況



挿図9-1 シタダル浜の沖の岩



挿図9-2 シタダル浜



挿図9-3 クマダ浜

名蔵シタダル海底遺跡から採集した中国製の貿易陶磁は、筆者（大瀨永亘）が1960年6月に青磁の碗や白

磁小皿を発見して以来、48年間通いながらフサキ浜、シタダル浜、クマダ浜、クードー浜などと地元で呼称されていた海岸一帯を踏査し採集した遺物である。これらの名蔵湾東南海岸の浜辺から沖合一帯を総称して「名蔵シタダル海底遺跡」と称しているが、中国製の貿易陶磁などの散布状況を見ると、狭義の地域で言うシタダル浜の南側岩山から板干瀬を境にして南側フサキ浜には非常に少ない。逆にシタダル浜から北側のクマダ浜にかけてもっとも多く、クードー浜にかけて次第に少なくなっている。特に白磁小皿、青磁の碗・小皿・大鉢・盤（皿）、染付の碗、褐釉陶器（南蛮）などがシタダル浜辺や浜前方の海底から採集された。またクマダ浜の干潟の礫層の中からも、大量の磨耗した青磁碗底部がフジツボやフナムシが付着した状態で発見された。

シタダル浜は中生代のチャートによって岩礁海岸を呈し、板干瀬の500～600mの沖にはクソタレイシグワ（岩）までの海蝕棚の海底はチャートの岩盤の緩やかな傾斜が続いて、急に深みに変わっていく地形である。その上に枝サンゴなどが繁殖している。そのため、シタダル浜の海蝕棚の海底の岩盤の上から船体・船倉や積荷の完品・貿易陶磁などを発見することは並大抵のことではない。

1977年ころ、韓国・木浦の新安海底遺跡から、元時代の沈没船が発見された。中国の寧波（浙江の慶元）から1323年に日本の博多に向かって航海途中に朝鮮半島の南西の海（全羅道新安郡の會島沖）で沈没した貿易船である。沈没した新安海底は分厚い泥層なので、船体・船倉や積荷の中国製の貿易陶磁が完品で数多く発見された（文化広報部 1983）。シタダル浜の海底の地質状況とは様相が異なるのである。

シタダル浜・海底一帯の中国製の貿易陶磁の散布状況から判断して、シタダル浜の沖クソタレイシグワ（岩）に、交易船が衝突、または座礁して沈没し、その際に積荷が潮流に乗ってシタダル浜の板干瀬北側、クマダ浜、クードー浜に流れていったと考えられる。シタダル浜の南側板干瀬が潮流を遮っているために、板干瀬北側から西の海底沖・クソタレイシグワ（岩）方面にのみ、白磁小皿の完品や青磁の碗・大鉢・盤（皿）そして大型の褐釉陶器（南蛮壺・甕）の口縁・胴部などが多く発見されるのだと想定される。また、台風などの後には、シタダル浜に限って必ずそれらの貿易陶磁が採集された。前方海底の枝サンゴ群生などに挟まれていた青磁碗や白磁の小皿などが台風などにより砂浜に運ばれてくると思われる。白磁小皿の完品のほとんどがシタダル浜やその海底から出土している。

また、クマダ浜一帯の散布状況は、大量の磨耗した青磁碗の底部破片や褐釉陶器（壺、甕）胴部小破片などが干潟のチャート礫層の中から広い範囲で採集される。また、数十点の染付（青花）がまとまって発見された。これらは干潟の小礫層の中から出土するのでほとんどがフジツボやフナムシが付着したりしていた。クマダ浜一帯からは、青磁碗高台が大量に発見される割に、青磁の胴部や口縁は非常に少ない。青磁や青花などが潮流大波に乗って干潟の礫層などの中をローリングしながら割れて運ばれてきた為と思われる。厚く硬い底部のみが干潟の礫層の中にめり込み遺存し、胴部や口縁は細切れに割れて分散して行ったと思われる。

14世紀中葉～16世紀ころは沖縄の琉球王国の官船が、明国への進貢をおこない、また東南アジア各地と貿易を行ったりしていた。その際の船も宮古・八重山諸島の島々で水や食料の補給など、あるいは風待ちや避難などで一時寄港したこともあり得よう。また進貢貿易の献上産物である寶貝、ヤコウガイ、牛皮、苧麻衣などの調達確保のために来島したとも考えられる。一方、日本から九州海商が威信財である中国製の貿易陶磁などを求めて来島したこともあり得る。さらに明国の海禁政策がはじまっても、中国福建沿岸海商らが宮古や八重山の島々に産出する交易産物（海産物など）を求めて来島したのである（大瀨 2008）。

シタダル浜の白磁小皿や青磁の碗破片、南蛮壺甕などを拾いだしてから48年間、筆者はたえず上記のよう

な地域との交易を示す遺物が発見されることも期待していた。中国製の貿易陶磁の見返りとして、地元の交易物産がここにまぎれていないのか、あるいは琉球、内地本土の物産がないのか、探査し続けたが発見されたのは、大量の青磁碗や白磁小皿、褐釉陶器などの中国製の貿易陶磁のみであった。そのことから、沈没船は琉球王国の官船（進貢船・貿易船）や大和船ではなく、中国の明私船（ジャンク船）であったと考えられる。これらの中国製の貿易陶磁も、中国福建沿岸海商らの明の私船、ジャンク船によって持ち込まれたものが、船ごと沈没したものと考えられる。

4. 中世のスク時代の船着場（港）説に対する疑問

沖縄石垣島水中発掘調査団（茂在寅男団長）が名蔵湾シタダル浜の前方に二列の大きなサンゴ石灰岩を組み合わせた石積みの遺構を中世のスク時代の船着場（港）の遺構ではないかと1985年新聞紙上に発表した内容には疑問がある。それは以下の理由による。

中世のスク時代の港（船着場）とするならば、飲料水補給のための流水や湧水が豊富になければならない。しかしシタダル岩山には岩と岩との間から滴る水を溜めた水があるだけである。この溜め水は一汲みするとすぐ無くなってしまふほどであり、飲料水の補給は全くできない。また、西向きで潮流は早く、北から風をまともに受け、冬期は港に不向きである。さらに、シタダル浜一帯が港であれば、ここを拠点として荷の積み出しが行われたり、休憩をとったり、多くの人々が入り出りするもので、港一帯には食料残渣の貝殻、獣魚骨や地元の土器片などが多く発見されるはずである。また、港の近くや後背地には消費地である大規模なスク時代の中世集落跡が必ずあるはずである。例えば、石垣島の東海岸の大浜海岸（ガヤシキパマ、アーヌパマ）の後背地としてフルスト原遺跡やウフスク村遺跡などがある。また、宮良海岸（ムニヤーパーマ）と宮良下ヌ屋敷（シムヌカク）遺跡や小波本（クバントウ）遺跡との関係。さらに、北海岸の川平湾奥の海岸（ハコーザキパマ）と後方の仲筋貝塚との関係がある。名蔵シタダル海底遺跡からは、食糧残渣の貝殻、獣魚骨や地元の土器片や近接地に中世の大規模な集落跡などは全く発見されていない。しかし、名蔵シタダル海底遺跡の東南1 km程の地に弓の名人であり剛勇のフサキ（富崎）ガバネーが居住したといわれるミナヌスクムルという小高い森がある。しかしここからは今の所、包含層は確認されていない。またミナヌスクムルの西にミンナ森と称される所がある。一説には、ここがフサキガバネーの居住地と言われている。ミンナ森でも青磁、南蛮が数点得られたのみである。生活に関係する土器を伴う遺跡としては、シタダルの東北1 kmの地点にクードー貝塚がある。クードー貝塚は規模も小さく、距離的な点、遺物の比較からして、シタダルと直接関係するかは疑問である。また、フサキガバネーにまつわる伝承は幾つか見られる。フサキガバネーが名蔵湾を航行する船を一矢で打ち沈める名人であったとの伝承もある。この伝承は、貿易船が名蔵湾を航行したことを示しているが、シタダルが港であるということには関連付けられない。故に、名蔵シタダル海底遺跡は中世のスク時代の船着場（港）ではなく、従って文化の玄関口でもない。

それではこの港と誤認された石積み遺構はいつ、誰が造ったのかが問題となる。それには以下の地元古老たちからの1985年以前での聞き書きがすべてを語ってくれていると思う。

字新川在住の宮里亀吉氏（85才）や字川平在住の仲野源一氏（83才）らは御木本真珠養殖場で働き真珠養殖に長く携わっていて「大正3（1914）年、5月ごろに名蔵湾の観音崎の北側で真珠の養殖をしたが、風のわざわい（台風など）や魚介類などによる被害が大きくなったので2～3年後に崎枝へ移り、そして川平湾

に移っていった」と、話している。

また、字新川在住の漁民の高良勇吉氏（56才）は「1960年ころまではエークを漕ぎながら漁撈をしていてシタダル浜は漁民の一時休憩する場所でもあった。シタダル浜の付近では、ボラを捕るための刺し網をかけたり、かつおの餌をとったりしていた。漁民の先輩たちからは、昔シタダル浜一帯で真珠を作っていたので、この一帯を通称ヒンクンヤー（真珠家）と呼んでいたのを聞いた。沖のクソタレイシグワ（岩）から板干瀬に沿ってサバニ（船）が往来できるように施されていたし、シタダル岩山の南側のアダンの生い茂ったところにマーギーラ（シャコガイ）が山のように積まれていた。真珠の養殖と関係があるかどうかは専門家でないからなんとも言えないが、20年前には無くなっていた。また、北側のクマダ浜の平坦地には電信屋の跡だといわれ、崎枝へ向かって海底ケーブル線があった」と述べている。これらのことから、二列の組み合わせたサンゴ石灰岩の石積みの船着場遺構は、大正3年の御木本幸吉の真珠養殖場の船着場だったのである（牧野 1972）。

さらに決定的な証拠は以下の資料に寄ろう。1987年3月26日から4月12日まで「石垣市立八重山博物館」で『絵で偲ぶ大田正議の我が島展』が開かれた。展示画のなかに名蔵湾にかけてあったミキモト真珠養殖場の全景画あり、その説明書きに「大正3年に名蔵湾クードゥ電信屋の南のシタダル近くに石積みの小湾を築き養殖場とした」と、記されていた。名蔵湾のシタダル浜にある船着場の二列のサンゴ石灰岩の石積み遺構は大正3（1914）年につくられた御木本真珠養殖場の跡であった。

陶磁器の年代と名蔵シタダル海底遺跡の年代等についての詳細は後章（関口報告）を参照してほしい。

[註]

1. 八重山諸島の石垣島、西表島、竹富島、小浜島、黒島、新城島（下地島）、波照間島で、地名の「○○○スク」・語彙が変化して「○○○シュク」と呼ばれるところに遺跡が多く確認できるのでスク文化と提唱した（大濱 1985）。
2. 『太祖実録』（明実録）の景泰3（1452）年6月辛巳（20日）の条に海禁政策下にあっても福建沿岸の居民（泉州・福州出身など）が母国で物資を購入し琉球王国に赴き私（密）貿易をしていることが記載されていることから、中国福建沿岸海商という名前に訂正した（大濱 1999 143頁／佐久間 1975／和田ほか 2003）。
3. 森本朝子・田中克子「沖縄出土の貿易陶磁の問題点—中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁」（グスク文化を考える—世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡と比較して〉の記録）沖縄県今帰仁村教育委員会編 2004 新人物往来社）のなかに、福建産粗製白磁という名称で説明をしている。
4. 琉球王国の外交文書『歴代宝案』によると、1434年、琉球王国は貢納品として550万個の海巴（寶貝）、また螺殻（夜光貝）、牛皮、苧麻衣（上布）などを明国へ献上している。また、1477年、朝鮮濟州島の船が嵐で難破し、三人が漂流し与那国島の島民に救助され、西表島、波照間島、新城島、黒島、多良間島、伊良部島、宮古島へと順々に転送され帰国している。彼らの見聞記によると、高い島の与那国島や西表島では粟・稲作で、低い島でも粟・黍（きび）・牟麦（おおむぎ）などを栽培している。また、各島々では、牛を飼育し、苧布などを着けている。おそらく民間レベル交易で八重山に無尽蔵にある海巴（寶貝）や螺殻、牛皮、苧麻衣（上布）などの交易産物を求めて中国福建沿岸海商らは来島したと思われる（三島 1989／森 2004／高崎 1971）。

5. 近世になって、八重山蔵元が勾玉を禁止している。『参遣状抜書（上巻）』（石垣市史叢書8、石垣市総務部市史編集室1995）の1704年、項の要約には「1、諸村で身分の上下にかかわらず女性が身につける玉を14、5個につき代米14、5俵で買い取り、むだに飾りたてるので、王府へ訴えて禁止した。しかし近年になってひそかに用いる者もあるとうわさになっているので、改めて禁止する。もし違反する者がいたら、遠慮なく申しでること」と記されている。
6. 各遺跡の名称は、古記録（八重山蔵元文書など）に記載された集落名称や地元で呼ばれている名称に統一した。八重山蔵元文書の『八重山島年来記』（石垣市史叢書13 石垣市総務部市史編集室1999）には、1619年の項に桴海村、1629年の項に仲筋村が記されている。この仲筋村の元村が仲筋貝塚である。仲筋貝塚からは17～19世紀ころの文物が一点も発見されていない。1651年項にも与那良村が記され、1750年の項には成屋村などの集落名が記載されている。

[参考文献]

- ・青山学院大学調査団・代表三上次男、田村晃一『沖縄・石垣島—ヤマバレ—遺跡発掘調査概報』1977
- ・青山学院大学調査団・代表三上次男、田村晃一『沖縄・石垣島—ヤマバレ—遺跡第2次発掘調査概報』1980
- ・青山学院大学調査団・代表三上次男、田村晃一『沖縄・西表島—与那良遺跡発掘調査概報』1982
- ・青山学院大学調査団・代表三上次男、田村晃一「沖縄県八重山郡竹富町—西表・成屋遺跡発掘調査概報」『青山史学—第9号』1987
- ・石垣市総務部市史編集室『参遣状抜書（上巻）』石垣市史叢書8 1995
- ・石垣市総務部市史編集室『八重山島年来記』石垣市史叢書13、石垣市 1999
- ・伊仙町教育委員会『カムィヤキ古窯跡群Ⅱ—ため池等整備事業（木之又地区）に伴う発掘調査—5』1985
- ・大瀨永亘・関口広次「八重山群島出土の古陶磁について」『物質文化31』1978 物質文化研究会
- ・大瀨永亘「八重山の先史時代を考える」『石垣市史のひろば—』第八号1985 石垣市総務部市史編集室
- ・大瀨永亘「落穂 スク時代」『琉球新報』1994年8月19日
- ・大瀨永亘「落穂 カー博士との出会い」『琉球新報』1994年12月2日
- ・大瀨永亘「名蔵シタダル遺跡について」『南島考古』No. 14 1994 沖縄考古学会
- ・大瀨永亘「八重山の古代文化とその起源を探る—先史時代から16世紀の英雄オヤケアカハチ・ホンガワラの乱まで」『東南アジア考古学会』第16号、1996、東南アジア考古学会
- ・大瀨永亘『八重山の考古学』1999 先島文化研究所、自費出版
- ・大瀨永亘『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』2006 先島文化研究所
- ・大瀨永亘「八重山諸島の交易—スク文化期を中心に」谷川健一編『日琉交易の黎明—ヤマトからの衝撃』2008 森話社
- ・沖縄県立博物館『沖縄出土の中国陶磁（上）—ジョージH・ケア氏 調査収集資料—先島編』1982・3
- ・岸本竹美「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」『紀要 沖縄埋文研究1』2003 沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・金城亀信ほか『首里城跡 京の内発掘調査報告書（1）』沖縄県文化財報告書』第132集1998 沖縄県教育委員会

- ・国分直一「九 原史時代への推移—その背景をなした事情をめぐって」『南島先史時代の研究』1972 慶友社
- ・佐久間重男「明代の琉球と中国との関係—交易路を中心として」『明代史研究』第3号 1975年12月 明代史研究会。
- ・佐藤伸二「南島の須恵器」東京大学東洋文化研究所編『東洋文化』48・49合併号 1970 東京大学出版会
- ・高崎彰「李朝実録より見た15五世紀末の南西諸島・先島社会」『第10次沖縄八重山調査隊—与那国島調査報告書』1971 早稲田大学アジア学会
- ・高宮廣衛「Ⅲ 古墳文化の地域的特色—11 沖縄 1 貝塚時代、2 城時代」編者 近藤義郎・藤沢長治『日本の考古学Ⅳ 古墳時代（上）』1967（3版発行）河出書房
- ・田中健夫「4 遣明船とバハン船」須藤利一編『船—ものと人間の文化史』1968 法政大学出版局
- ・滝口宏（代表）・西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚「八重山の考古学・結語」『沖縄八重山』1960 校倉書房
- ・仲筋貝塚発掘調査団・代表大濱永亘・関口広次・谷川章雄・中沢富士雄・阿利直治・牛沢百合子『沖縄・石垣島—仲筋貝塚発掘調査報告』1981 自費出版
- ・韓国文化広報部文化財管理局『新安海底遺物 資料Ⅰ』1983 同和出版公社
- ・牧野清「真珠養殖事業」『新八重山歴史』1972 自費出版
- ・三島格「海巴と螺殻—琉球と中国華南の交渉」『南島考古学—南島・大和および華南・台湾』1989 第一書房
- ・森浩一「第6話の対話 宝貝と倭人」『海から知る考古学入門—古代人との対話』2004 角川書店
- ・森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 1982 日本貿易陶磁研究会
- ・森本朝子・田中克子「沖縄出土の貿易陶磁の問題点—中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁」（グスク文化を考える—世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡と比較して〉の記録）沖縄県今帰仁村教育委員会編、2004 新人物往来社
- ・山里純一「Ⅲ 遣唐使と南島路」「Ⅳ 南島の貢物・交換物」『古代日本と南島の交流』1999 吉川弘文館
- ・和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子『明実録』の「琉球史料（二）—歴代宝案編集参考資料7」2003（財）沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室